

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2016年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	キリスト教学研究科 特任教授	宇井 志緒利 印
研究課題	内戦後のカンボジア社会における宗教受容の変化とキリスト教の広がり	
研究期間	2016年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 358,813円 / (採択金額) 361,000円	
研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)		
<p>本研究は、内戦後のカンボジア社会の変化とそれに伴う人々の宗教受容の変化、それがキリスト教への入信にどう影響しているのか、その要因とメカニズムを明らかにしようとするものである。</p> <p>地域としては、グローバル化が進む中で特に急速な社会変化が起こっている、最後まで戦闘地域にあったタイ国境沿いの元ポル・ポト派支配地域に焦点を当てる。</p> <p>文献研究の他、教会とその活動への参与観察、個別インタビュー、グループディスカッションなどの質的方法を用いてデータを収集し、分析する。</p> <p>更に、現地協力者と共に研究を進める。その過程で彼ら自身の経験を記録し分析するモチベーションと能力の向上に寄与することも目指す。</p>		

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)
[ カンボジア ] [ キリスト教 ] [ 宗教受容 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

上記研究目的を達成するための予備段階として、2016 年度は、先行文献研究、データ収集のためのツール作成、調査候補地域へ訪問し予備的な調査を行った。

**1) 文献収集・研究**

散在するカンボジアのキリスト教・キリスト者、教会、及びカンボジアの仏教に関連する文献・報告書などを国内およびカンボジアで収集した。現地ではキリスト教および仏教を背景に持つ NGO とその関係者の協力や紹介を得た。カンボジアにおけるキリスト教をめぐる特徴をより深く理解するため、仏教が多数をしめるアジアの国々のキリスト教の動向に関する関連文献も収集した。

**2) 質的データ収集のためのツールづくり**

文献研究とこれまでに現地で得た情報・見聞に基づいて、個別インタビューおよびフォーカスグループディスカッションを想定した質問票案を作成した。回答者と所属教会の基本的情報の他に、キリスト教を知ったきっかけ、入信の経過・理由、入信に対する家族や親しい人たちの反応、近年の社会変化で気になっていること、そのような社会変化の中で寺やキリスト教会はどんな役割を果たしているか、などを項目に含めた。

**3) 現地訪問調査**

2017 年 1 月 26 日～2 月 16 日、カンボジアに出張し調査を行った。現地協力者と共にプノンペン近郊（プノンペン市内、タケオ州、コンポンチャム州）とタイ国境沿い（プレアヴィヒア州、オッドーミエンチェイ州、バットンバン州、パイリン州）にあるキリスト教会や団体（主にプロテスタント、一部カトリック）、聖職者・リーダーまた信者の家庭を訪問した。礼拝出席や活動同行、家庭訪問などの参与観察や、個別・グループインタビューなどを通して情報・データ収集を行った。一部仏教寺院と関係者も訪問した。

個人史や家族の事情などきわめて私的な話題を含むため、インタビューは対象者の所属する教会や自宅などで、礼拝や行事の前後、食事後や自由時間に半構造的に行った。言語は主にクメール語、一部英語（現地協力者による通訳）を用いた。一人またはグループあたりのインタビュー時間は、60 分～120 分であった。

面談者計 27 名（内 18 名が聖職者やリーダー）のうち、質問票案の項目を概ね網羅できたのは約半数で、残りは項目の一部のみの断片的な聞き取りとなった。

文献調査と現地訪問調査で収集したデータの分析は継続中であるが、ここに予備的な知見・考察を報告する。

**1) 人々が感じるカンボジアの社会状況の変化**

カンボジアでは約 30 年に及ぶ武力紛争が 1999 年に完全終結し、ようやく全地域で復興・社会開発が始まった。1999 年には ASEAN に加盟、2004 年には WTO（世界貿易機関）に加盟し、2000 年代中期以降グローバル経済の中でカンボジアの経済開発が急激に進んだ。2015 年に ASEAN 統合に向けて、2010 年以降さらに加速した。特にここ数年の地域社会また人々の生活様式に大きな変化をもたらしていることが、インタビュー回答や観察から確認された。

近年の好ましい社会変化としては、道路や電気、通信、学校、保健施設などのインフラ整備、住居、水、食料などの生活改善、地方にも工場が立ち現金収入が得られること等が挙げられた。一方、好ましくないこととしては、忙しくなった、金や物を中心に考えるようになった、多重債務（複数の小規模金融機関から借金）の増加、ギャンブル、飲酒、薬物乱用の増加が挙げられた。薬物については、都市部に限らず遠隔地農村部でも若者の間で急速に広がっており、年々悪化・若年化している。また、若者の農業離れと雇用不足も大きな問題となっている。移住労働はかつて首都プノンペンや隣国タイへの出稼ぎが主であったが、近年韓国やマレーシアへの出稼ぎが増えている。この影響で、ある地域では働き手人口が減り、また家族関係の問題も出始めている。

**2) 人々のニーズの変化と宗教受容の変化要因**

社会状況の変化に伴って、人々のニーズは変化し、教会との関わりや入信のきっかけも多様化していることが示された。内戦と虐殺の経験から、新たな生き方・意味の模索が根底にあるが、2000 年中期位までは、人々の関心・ニーズは貧困・日々の生活や健康問題に

**研究成果の概要 (つづき)**

対する解決であった。また、若者は職探しに直結する技術（英語やコンピューターなど）を学ぶ機会を求めていた。具体的に必要な支援が得られたことや、病気の治癒など祈ったことが叶えられた経験をきっかけに入信した者も多い。

これらのニーズは現在でも多くの人々、特に地方に住む人々の中にある。加えて、ある程度生存レベルの課題を克服した近年では、伝統的な家族親族や隣近所の助け合い関係が弱くなっていく中で、血縁・地縁を超えた新たな相互助け合いのグループ・コミュニティーを求めていることが示唆された。若者も技術習得だけでなく、楽しむ時間、信頼できる友人関係、自己の指導性向上も求めている。

この数年でスマートフォンが急速に普及し、世界中の様々な情報が安易に入手できるようになった。同時代に生きる者と自分・自分の国の状況の違いを知り、現状に対する不満や怒りが高まっている。近年の若者に焦点をあてたキリスト教会の活動が、これらのニーズに呼応しているのではないかと思われる。

このような社会状況と人々のニーズの変化の中で、カンボジアの国教と位置づけられている仏教は、人々の多忙化にともない、文化的行事の場に変化してきた様に見られる。かつて寺は、若い修行僧や貧しい家庭の子どもを受け入れ、教育・訓練の場を提供してきた。しかし近年、生活状況が改善され、子どもの教育の機会が充実してきたこともあり、その役割は縮小している。「仏教寺院は人々から寄付や贈り物を受けるばかりで、困っている人を助けてくれない」と言う声も多く聞かれた。近年たびたび起こる僧侶の俗的な事件や、独裁的で不正のはびこる現政権による国家仏教の政治的な利用も、人々の気持ちが離れていく要因と見られる。

**3) 元戦闘地域の宗教受容の特徴**

最後までポル・ポト派の拠点であったタイ国境沿いの地域は、他の地域から約 10 年遅れて本格的な復興開発が始まった。そこにグローバル経済の波は一気に押し寄せた。程度の差はあるものの、地域社会、人々の生活と態度の変化など、課題は共通している。しかしながら、この地域ではキリスト教が比較的抵抗なく受け入れられている様に見られた。この地域に長く住む人々、すなわち元ポル・ポト派の人たちは、特定の宗教を持たない生活を長く送ってきた。他の地域と異なり、キリスト教への入信は「仏教からの改宗」ではない、という点が特徴である。また長引いた内戦の苦難の経験から、新たなよりどころを見出したい思いも強い。この地域においても、近年は生存レベルを超えた信頼おける関係性への求めが高まっている。

**4) カンボジアにおける宗教受容とキリスト教の広がり背景の特殊性**

アジア諸国にも、モンゴルなど社会主義政権を経て、以前広く信仰されていた宗教の復興と並行して、プロテスタント系のキリスト教信者が増加している国々がある。社会主義政権下の宗教活動の制限への反動、欧米のキリスト教系援助団体の流入による影響など、共通する要因はいくつか見られる。その中で、カンボジアの特殊性としては、次のことが見出された。

- ポル・ポト政権（1975～79年）下、宗教が完全禁止され、宗教指導者が虐殺された。
- その後の社会主義政権（1979～91年）下、仏教は復興が奨励されたが、キリスト教は厳しく制限された。
- 大量の難民が国外に流出し、多くがタイ難民キャンプでキリスト教に出会い入信した。彼らが本国へ帰還後活発に宣教活動を行っている。
- 難民として世界中に散ったカンボジア人が、定住先（特に米、加、豪）で入信・訓練を受け、宣教師・支援者として本国での宣教活動を支援している。
- 近年韓国からの支援が、地方におけるプロテスタント系小規模教会の広がりを後押ししている。

この度の予備調査から得られた上記知見と考察を深めるために、現地協力者も交えて分析を行い、更に必要なデータ収集を行って検証していきたい。

※ この（様式 2）に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式）を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

宇井志緒利、「アジアの教会特集」の中のカンボジア編、福音と世界、2017年7月号 掲載予定

④ その他

カンボジアに関わるNGO団体主催の会合等で 報告予定